



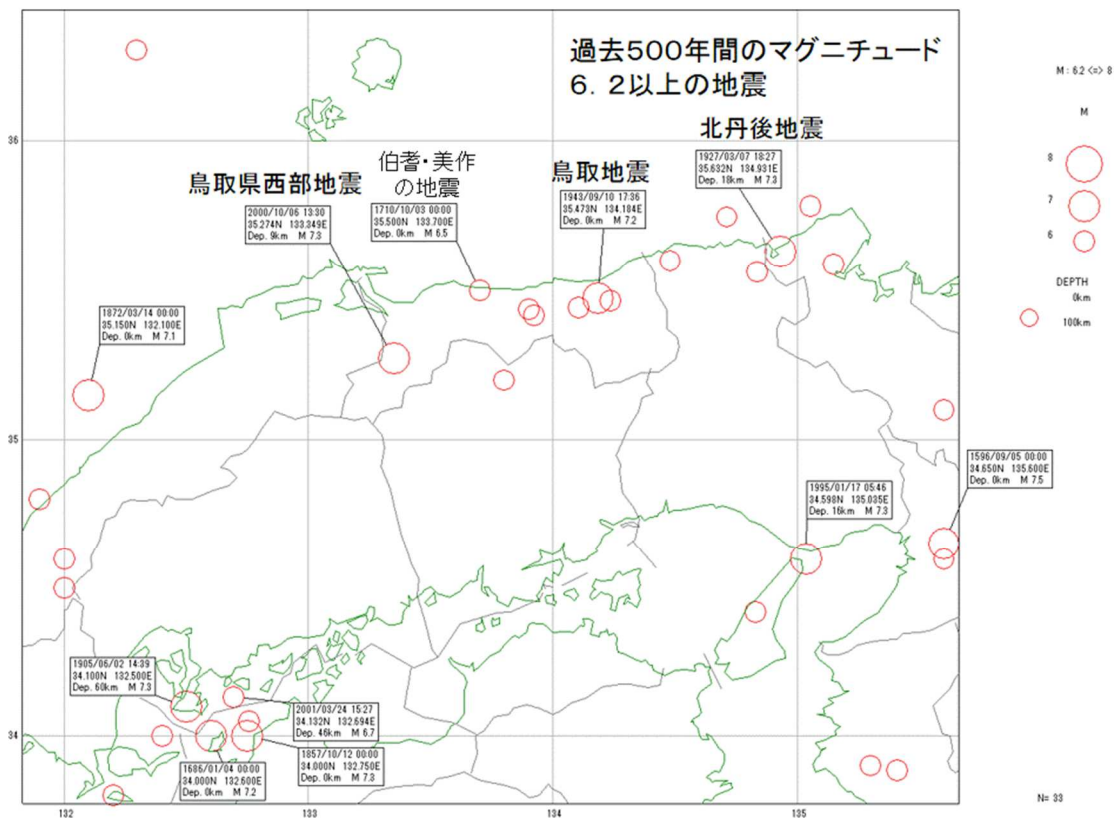
### 鳥取県中部の地震

10月21日14時7分頃、鳥取県中部でマグニチュード6.6（気象庁暫定値、防災科学技術研究所によると6.2）の地震が発生しました。今回の地震で被災された皆様、避難生活をされている皆様に心よりお見舞い申し上げます。



気象庁による震度分布

下の図でもはっきりとわかりますが、京都府の日本海側から兵庫県をぬけて鳥取県では、これまでもマグニチュード7クラスの地震が帯状に発生しています。

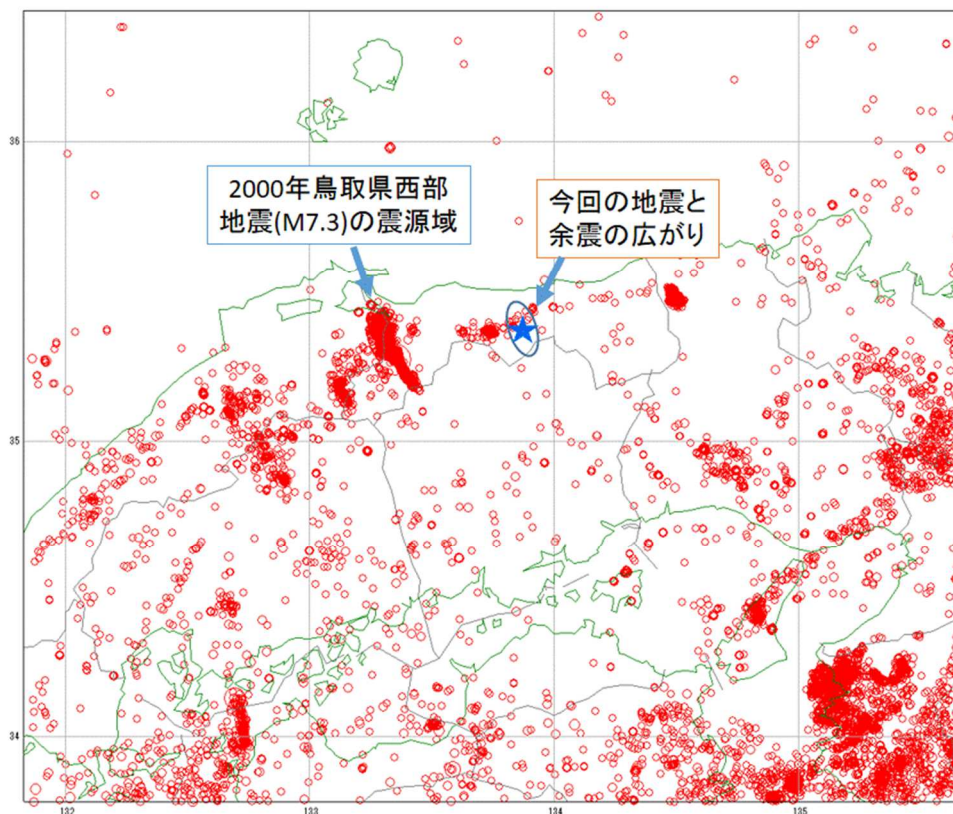




これまでの主な地震活動をリストアップしてみますと、  
1710年 M6.5 伯耆・美作の地震、1711年 伯耆の地震 ←同じ規模の地震が続発!  
1927年 M7.3 北丹後地震 (死者 2,925 人)、  
1943年 M7.2 鳥取地震 (死者 1,083 人)、  
2000年 M7.3 鳥取県西部地震 (幸い死者はゼロ)  
2016年 M6.6 鳥取県中部の地震 (今回の地震) などと発生しています。

このような地震活動が過去にあったため、京都大学防災研究所は鳥取観測所を 1964 年に設置し、現在も観測を続けています。鳥取県およびその周辺は日本の内陸地域のうち、かなり地震活動が活発な地域なのです。

次の図は 2000 年以降の微小地震活動を表示したものです。今回の活動は「未知の活断層で発生」と政府・地震調査委員会が発表していますが、実は最近の内陸被害地震はかなりこの”未知の”活断層で発生していました (2000 年鳥取県西部地震、2004 年新潟県中越地震、2008 年岩手・宮城内陸地震など)。日本列島ではこの程度のマグニチュード 6 クラスの地震はどこでも発生すると考える事が肝要です。



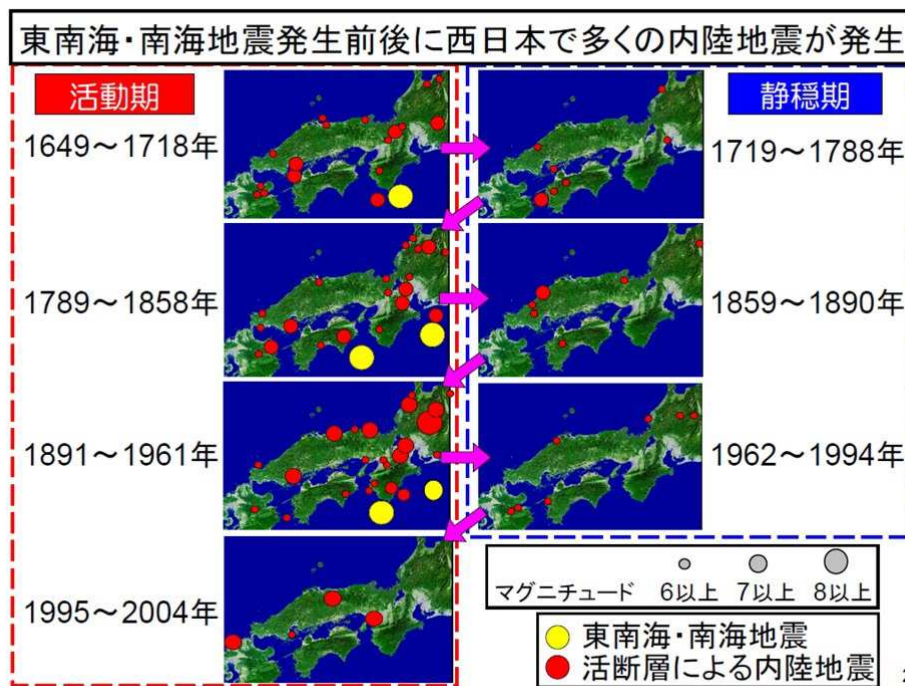
DuMA のウェブサイトの以下のページ (目的と活動→サイエンスする地震(M)→各 M クラスごとの獅子の発生数) をご覧いただくと幸いなのですが、  
<http://www.duma.co.jp/about-1-cx8h>

2000 年から 2012 年までの 13 年間で M6 クラスの地震は 200 個以上発生しています。そのほとんどが海域で発生しているため、被害地震となりませんが、陸域 (いわゆる直下型地震) で発生すると今回のような被害が出る地震となるのです。



DuMA では中国地方の地震活動の異常（静穏化）を5月以降繰り返して述べてきましたが（5月23日のニュースレターが初出）、今回の地震はその領域からは少し外れているようです。10月10日のニュースレターで、異常（静穏化）の中心が少し西側に移動して存在している事を示しました（現在の中心は広島県・島根県および山口県東部）。今後この異常がいつ消えるかが鍵となります。今回の地震がこれまで注意を喚起してきた中国地方の静穏化に対応した地震とは考えにくく、今後、さらなる地震活動が中国地方（あるいは瀬戸内海）で発生する可能性が残っていると考えています。

今回の鳥取県中部の地震は、フィリピン海プレートの沈み込みが根本原因ですが、従来からの知見として、南海トラフ沿いの巨大地震の前には内陸での地震活動が活発になるという事が経験的に知られています。下の図は尾池和夫先生（元京都大学総長）の原図をもとに作成されたものですが、東南海・南海地震の前（ただし10年オーダーです）になると内陸地震が活発化するというものです。熊本地震もこの範疇の地震と考えられます。



## 今後の推移について

まず、今回の地震は中国地方における歪みの蓄積を表したものである事は確実です。特に鳥取県周辺の地震活動の特徴として、同じ規模の地震が数ヶ月から2年ほどの間に続発していたという過去があります。今回の地震を単純に本震と考える事は難しいと思います。

さらに地下天気図®の中国地方の静穏化が今後いつ解消するかがキーポイントとなると思います。最近の2001年の芸予地震が代表例ですが、瀬戸内海での地震や広島、島根、山口県の内陸での地震発生の可能性が残されていると思います。

今回の地震は中国・四国地方の地震活動の活性化の始まりと考えるべきかもしれません。